

早稲田大学 中川研究室 修士2年 田中崇允
 早稲田大学 中川研究室 修士1年 沼田飛鳥
 早稲田大学 中川研究室 学部4年 朝比奈祐也
 早稲田大学 中川研究室 学部4年 日請真宏

1. 調査目的

東日本大震災においては、仮設住宅の規格が施行業者によってまちまちである等、仮設住宅団地間での格差が生じていることが問題点として指摘されている。そこで、本調査では、被災地仮設住宅団地の内部環境及び、隣接する地域における医療施設・福祉施設・仮設店舗等の周辺環境を調査する。

2. 行動概要

今回の合同調査における行動概要(表1)、調査対象地の概要(図2-1, 図2-2 および表2)を以下に示す。

表1 行動概要

日時	場所	調査内容
H23.9.15	宮古市街地	市街地被害の現状把握
	田老地区	市街地被害の現状把握
	田老地区郊外	仮設住宅団地の現状把握・調査
H23.9.16	吉里吉里地区	仮設住宅団地の現状把握・調査
	大槌町市街地	市街地被害の現状把握
	大槌町山間部	仮設住宅団地の現状把握・調査
	釜石市街地	仮設住宅団地の現状把握・調査
H23.9.17	石巻市街地	市街地被害の現状把握

表2 調査対象地の概要

市町村	名称	設置場所		建設予定戸数	着工	完成	備考
		所在地					
宮古市	① グリーンピア三陸みやこ(駐車場)(テニスコート)	宮古市田老字向新田148番地		248戸	H23.3.25	H23.5.23	テントでの日用品販売
				37戸	H23.4.13	H23.5.11	
				122戸	H23.4.21	H23.5.29	
釜石市	② 釜石市市民体育館グラウンド及び駐車場	釜石市桜木町1丁目1		113戸	H23.4.22	H23.5.27	高齢者等サポート施設
				1棟			
	③ 日向地区民有地	釜石市鶯住居第29地割地内	199戸	H23.4.22	H23.6.5	高齢者等サポート拠点	
	④ 日向地区国有地	釜石市鶯住居町第29地割地内	17戸	H23.5.16	H23.6.25	(公)	
	⑤ 平田多目的グラウンド	釜石市大字平田第5地割地内	240戸	H23.6.3	H23.8.3	(公)	
大槌町	⑥ 和野橋下流側民有地	大槌町大槌第5地割恵水講地内	253戸	H23.4.21	H23.5.29		
			20戸	H23.6.10	H23.7.9	グループホーム型	
	⑦ 三枚堂橋下流側民有地	大槌町小槌第21地割地内	125戸	H23.4.29	H23.6.25	高齢者等サポート拠点	
			1棟	H23.6.10	H23.7.25	高齢者等サポート拠点	
	⑧ 吉里吉里地区民有地その2	大槌町吉里吉里第9地割地内	48戸	H23.5.6	H23.7.11		
			10戸	H23.6.10	H23.7.26	グループホーム型	



図2-2 調査対象地の概要(大槌町)



図2-1 調査対象地の概要(釜石市)

本稿では、主に二日目に行なった調査結果について述べることにする。次に、調査対象地の選定方法について述べる。1日目(9/15)に行なった田老地区郊外の仮設住宅団地の視察を通じて、2日目以降の調査で着目する項目を決定した。その後、仮設住宅団地の内部環境・周辺環境にいくつかのバリエーションが見られる事を考慮し、調査対象地を選定した。

3. 調査内容

仮設住宅団地の現状を整理するにあたって、①団地規模、②地理的条件、③団地内の内部環境、④情報量、⑤周辺施設、⑥支援者による活動、の6つの着目点を抽出し、整理した。

以下にそれぞれの着目点に沿って、各仮設住宅団地の差異を纏めていく。

3-1 団地規模

今回視察した仮設住宅団地は、17戸程度の比較的小規模な団地から、240戸程度の大規模なものまで様々だった。(戸数については表2参照)



図3-1 仮設住宅団地 団地規模

3-2 地理的条件

もともと公園や市民施設があった広々とした場所に立地しているものと、狭く木々が鬱蒼としているなど本来住宅を構えるような場所でない場合に差がある。また山間部であるため周囲に既存の住宅が少ないものと被害を受けていない市街地にある場合でも差がある。

表3-2 仮設住宅団地の地理的条件

名称	地理的条件
① グリーンピア三陸みやこ	沿岸にある田老地区(破壊)の市街地から離れた海からは1km、標高148mの公園内。駐車場、テニスコート等あり。
② 釜石市民体育館グラウンド及び駐車場	釜石駅から3km 付近にロードサイド店を有する釜石街道・国道283号線から数百m 標高20mほど
③ 日向地区民有地	鶴住居市街地及び駅周辺(壊滅)から1kmほど山間の細い川沿いに入った集落の並びから細い砂利道で山側に入るため傾斜地を背後に持つ。
④ 日向地区国有地	鶴住居市街地及び駅周辺(壊滅)から1kmほど山間の細い川沿いに入った集落の並びで釜石山田道路の高架下。橋げたに挟まれた狭い土地。
⑤ 平田多目的グラウンド	国道45線沿いの平田総合公園内。沿岸の平田駅(破壊)から1.5km、標高70mほど上る。
⑥ 和野橋下流側民有地	大槌市街地(壊滅)から山間部へ9kmほど大槌川を遡った川沿いに広がる田園地帯。周辺の家もまばら。
⑦ 三枚堂橋下流側民有地	大槌市街地(壊滅)から山間部へ3kmほど小槌川を遡った山間部に広がる田園地帯。
⑧ 吉里吉里地区民有地その2	吉里吉里市街地(壊滅)から1.5km先の浪板海岸から山間へ800mほど入った標高20mほどの木々に囲まれた空間。



図3-2 仮設住宅団地 地理的条件

3-3 団地内の内部環境

釜石市平田多目的グラウンドには、東京大学・高齢社会総合研究機構と連携し、「コミュニティーケア型仮設住宅」が建設されている。敷地内に介護拠点や託児所を併設するもので、高齢者の孤立防止や地域交流などを配慮した設計となっている。住宅間の通路をウッドデッキにし、玄関にスロープを設けるなど、バリアフリーにも重点を置かれている。

表3-3 仮設住宅団地の内部環境

名称	仮設住宅団地内部環境
① グリーンピア三陸みやこ	プレハブの外装がむき出し状態。共同店舗のテントとベンチあり。集会所あり。最寄り駅までバスあり。
② 釜石市民体育館グラウンド及び駐車場	プレハブの外装がむき出し状態。サポートセンターの他に談話室の一室あり。
③ 日向地区民有地	プレハブの外装がむき出し状態。A~Eまで地区に分敷。高
④ 日向地区国有地	プレハブの外装がむき出し状態。一室を談話室にしている。
⑤ 平田多目的グラウンド	砂利の駐車場と芝生の公園と木製遊具あり。一般仮設住宅ゾーンの他に、ケアエリアとしてウッドデッキ上に入口を向き合わせの状態に配置した仮設住宅、及び遊具の周辺に子育てゾーンとして仮設住宅のゾーニングを図っている。
⑥ 和野橋下流側民有地	外装にタイル使用。集会所周辺には花の植木鉢。高齢者等サポートセンターを一つの地区にまとめて3棟配置。A~Fまでの地区に分かれて、一部にはさらに小規模な集会所あり。
⑦ 三枚堂橋下流側民有地	プレハブの外装がむき出し状態。壁面にゴーヤ等の植物を育てる。高齢者支援施設前はアスファルト舗装他砂利。
⑧ 吉里吉里地区民有地その2	プレハブの外装がむき出し状態。壁面にゴーヤ等の植物を育てる。



図3-3 平田第6仮設団地 内部環境

3-4 情報量

仮設住宅に暮らす被災者が得る、仕事・周辺施設などに関する情報量が、満足あるいは不足しているかについて調査を行った。1つの仮設住宅団地には必ず1つの掲示板が設置されており、就職相談会のような仕事に関する情報はほぼ全ての掲示板に掲載されていた。また、掲載されている情報の質が団地ごとに異なり、例えば就職相談会の掲示を例に挙げると、山間部での情報が限定的であるのに対し、都市部における情報量の方が比較的、内容が豊富であった。

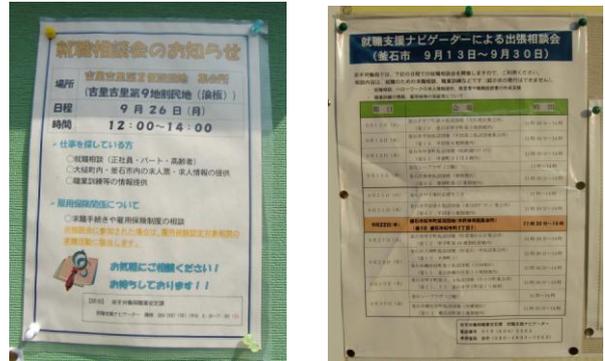


図3-4 就職相談会に関する情報

3-5 周辺施設

市街地に位置する釜石市民体育館は既存の周辺施設に恵まれ、利便性が高い仮設住宅となっていた。一方、山間部に位置する仮設住宅では、市街地で買い物等をするためには自動車に頼らざるを得ない状況となっているものと、周辺に仮設の店舗や医院が存在するものが存在した。グリーンピア三陸みやこでは、敷地内にテントで作られた共同店舗内に複数の店舗が営業しており、その他既存の建物を利用した理容店・美容店や仮設医院も設けられる等、利便性が考慮されていた。

表3-4 仮設住宅団地の周辺施設

	名称	周辺施設
①	グリーンピア三陸みやこ	仮設住宅内に共同店舗「たろちゃんテント」 ヤマザキショップ、各種個人商店、宅配便等 理容店・美容店、仮設歯科医院
②	釜石市市民体育館グラウンド及び駐車場	市街地に位置する為、スーパーマーケット、 病院等周辺施設多数
③④	日向地区民有地・国有地	なし
⑤	平田多目的グラウンド	なし
⑥	和野橋下流側民有地	なし
⑦	三枚堂橋下流側民有地	仮設内科・小児科医院、 仮設店舗(酒店、クリーニング店等)
⑧	吉里吉里地区民有地その2	1.5kmほど離れた場所に仮設コンビニ



図 3-5 仮設医院・仮設店舗

3-6 支援者による活動

様々な主体が支援者として活動していた。三枚堂でスーパーマーケットによる移動販売車の他、生花販売をしている車がみられた。また、交通弱者の送迎やケアサービスといった、介護・福祉関連の車は各所でみられた。仮設住宅内では、集会所などにおいて、お茶会や健康相談、子供向けのイベント等が行われている様子であった。



図 3-6 移動販売者・送迎車

4. まとめ

- ・想像よりも、仮設団地間での格差が存在する事が確認できた。
- ・小規模な仮設住宅団地の場合は、周辺施設によって必要な機能を担保する必要がある。よって、周辺環境が十分考慮された上で仮設住宅団地の計画・建設が行なわれるべきであると言える。
- ・今回抽出した着目点から、今後の調査研究における方法論の決定、指標の選定を行うことが課題である。

5. 感想

(田中)

私個人としては、生きるために必要な食物や生活必需品としてのライフラインがどの程度復旧しているのか、という点が問題意識であった。特に大槌町における視察で、コンビニ

のような機能を備えた仮設店舗を何軒か周ることができた。

しかし仮設住宅から距離があり、車を利用する事ができる人とできない人で、そうした店舗にアクセスすることへの格差が生じているのだという話をボランティアの方から聞いた事が印象的であった。今後は、こうした仮設店舗がどのような主体によって立ち上がり、運営されているのか、またボランティアの方々等による日常的な物資の供給はどのようになされているのか、その仕組みについて考えを深めていきたい。

(沼田)

三陸沿岸の津波被害にあった街を見て率直に思ったのは、無力感だった。都市計画とは何か、都市に住むとは誰が決めて何のために整備するのか、安全な都市とは何か、都市整備に関する根本的な疑問が次々と、自分の中に湧いてきた。自然の利を受けるためにこの地に住むならば、代償としてリスクは負わねばならないものなのだろうか。自然の中に都市を造り人が住まう、そのどこまでが、自己責任で、どこまでが、守らねばならない部分なのだろうか。その責任は、住民にあって、その自治体にあるとして、それを助ける土木の都市計画の専門家は、何を前提にまちづくりに立ち向かっていくべきなのか。人々の安全と将来を考え住むことを規制することと、住みたいと思う人のために技術を高め知恵を絞るのと、どちらも都市計画なのだろうが、その二つは矛盾すると思った。

(朝比奈)

今回の調査は震災発生から半年後に行ったものであり、瓦礫の多くは片付けられていたが、実際自分の目で見た光景はテレビや新聞を通して見た映像よりもはるかに衝撃的であった。それら媒体からも恐ろしい自然災害が起きていることは伝わるが、遠く離れた地にいるとどうしても人ごとのように感じてしまう部分がある。しかし現地に立つことで、もちろん津波を直接体験した人の恐怖とは異なるものの、少しでも津波の恐ろしさを実感できたように思う。また、仮設住宅のある場所では殺伐とした、ある場所では和やかな様子も現地に立ってこそ伝わるものであった。調査地の空気を感じるためにも、現地に赴くことが重要だと理解できた調査であった。

(日請)

今回の東北視察を終えて感じたことは、地元の方々・ボランティアの方々働きで、瓦礫の片付けが予想以上に進んでいる地域があったことである。実際に現地で見て得る情報は衝撃的であり、被災地は悲惨な状態ではあったものの、徐々にではあるが復興のために働く方々の姿は印象に残った。私

たちは異なる地域を数か所視察したが、被害の程度は様々であり、人の暮らせる状態・そうでない状態の地域もあった。その違いが復興の過程にも影響を及ぼすのではないかとも感じた。被災地の状況を実際に現地で把握することができたのは大変有意義なことであった。最後に、このような貴重な経験をさせていただいた事に感謝し、今回得られた知識をこれからも大事にしていきたいと思う。

参考文献

季刊まちづくり 32号 特集「東日本大震災「復興まちづくりシナリオの提案－市民事業の展開に向けて」